

女はなんにも言はない。なんにも言はないで、唯横を向いてゐる。

『どうしたの。』

女はやつぱり黙つてゐる。黙つてゐて、横を向いてゐる。

『いま何處にゐるの。』

女はやつぱり黙つて、横を向いてゐる。

やがて暗闇へすうつと消えた。

俺は女と二人、小さな車へ重なり合つて乗つてゐる。女の身體が重い石のやうに俺の身體を壓す。

苦しい。苦しい。息が詰まりさうだ。

それでも俺は笑つてる。俺の笑つてる顔が俺によく見える。

三階だか四階だかの、宿屋のやうな家の前を通る。

三階だか四階だかの手摺につかまつて、往來を見おろしてるのは牧師のS先生だ。

『先生、御免なさい。』

俺はなんだか非常に悪い事をしたやうな気がした。俺は女の背中へ顔を押しつけて先生に詫まつた。

『先生御免なさい。』

俺の聲は犬の遠吠のやうに響いた。女の背中は俺の涙に濡れ

た。

先生はやつぱりこつちを見てゐる。こつちをちつと見詰めて、黙つてゐる。

俺は先生が恐い。先生が恐い。

重い。重い。

恐い。恐い。

大きな手洗鉢の真ん中から細い噴水が出てゐる。噴水はゴボゴボと悶へてはすうつと出、ゴボゴボと悶へてはすうつと出た。それを見てゐると、俺は胸が苦しくなつて来た。

楊子を使ひながらY君がこつちを向いた。Y君の額の皺がいつもより暗く見える。

『Kとかいふ人は今どうしてるんです。』

Y君の聲は噴水の悶へるやうに咳入った。

『Kですつて。』

俺はKが思ひ出せなかつた。俺は唯ゴボゴボと咳入る噴水が悲しかつた。

俺はY君と列んで顔を洗つた。二人の後に一人宛汚い女が立つてゐた。二人はてんでに後から女に尻を壓されるやうな氣がした。

顔を洗つて了ふと、女が手拭を出した。汚點のある穢ない古い手拭だ。

噴水がゴボゴボと苦しさに咳入る。

俺は又胸が苦しくなつた。

……亭のやうでもある。俺の家のやうでもある。俺の家のやうでもある。……亭のやうでもある。

染次が歌を唄つてゐる。細い糸を辿るやうな、悲しい。頼りない聲で唄つてゐる。爪弾の音が薄い硝子板を弾くやうに痛ましく響く。

歌の文句は分からないが、時々「身は浮き舟」のと張り上げる聲が聞える。張り上げた後は、消えるかと思ふ程調子が暗くなる。

連れはいつものY君だ。Y君はいつもの通り額に暗い皺を刻んで、黙つて染次の歌を聞いてゐる。

川がある。川の向うに道がある。その暗い道を細長い提灯が黄いろく慄へながら走つてゐる。

俺はその提灯をちつと見詰めてゐる内に、譯もなしに涙が出て来た。

女中が酒の代りを持つて来た。

髪の毛のほつれた、頬の青白い影の薄い女だ。

女は始終横を向いてゐる。誰が何を言つても横を向いてゐる。

『Kさん。』

Y君が呷くやうな低い聲で、そつと斯う言ふと、女中は驚いたやうにこつちを向いた。

Kだ。

古びた白木の大きな机がある。

籐張りの粗末な椅子が五六脚ある。

一段高い壇のやうな所があつて、その上にも古びた机と粗末な椅子が列んでゐる。

あたりは薄暗くて壁も天井も、床も見えない、唯、机と椅子とが寂しさうに、ちつと動かずにあるのが見えるばかりだ。

警察のやうでもある。裁判所のやうでもある。併し、人は誰もゐない。

頬の青白い髪の毛のほつれた女が、首をうな垂れて、涙をぼろぼろ零しながら這入つて来た。

Kだ。

女は背中に座蒲團を丸めて負ぶつてゐる。女はその座蒲團の

中に赤ん坊でもゐるやうに、両手を柔かに背中へ廻してゐる。併し、座蒲團の中にはなんにもゐない。

俺はKの横顔をちつと見詰めてゐる。俺はそこにゐるのではないが、何處からかちつと見詰めてゐる。

女は俯向いて、泣いてゐる。

誰も人は出て来ない。

俺は女の負ぶつてゐる座蒲團を見ると、急に心が暗くなつた。

「身は浮き舟の……」

Y君が何處かで唄つてゐる。響のない唄れた聲で、車が石の上を軋るやうに唄つてゐる。

やつぱり天井も、壁も、床も見えない。

人も出て来ない。

薄暗い机の前で、女は座蒲團を揺すりながら泣いてゐる。

俺は手足を縛られて小さな穴へ押し込まれてもしたやうに息苦しくなつて来た。心が見えなくなる程暗くなつて来た。

「身は浮き舟の……」

染次が何處かで唄つてゐる。細い糸を辿るやうな、頼りない悲しい聲で唄つてゐる。

歸^{かへ}

り

道^{みち}

その時分私は巢鴨の伯父の所に厄介になつてゐました。伯父の家は乳屋で、牛も七八頭は飼つてゐました。家の周囲はずつと野菜畑で、薩摩芋だの人參だのジャガ芋だの牛蒡だのが作つてあるのです。あなた方はまだジャガ芋の花を見た事がありませう、真中が黄色くて周囲が白いあの水仙のやうな美しい花は、毎朝どんなに私の忙しい心を慰めて呉れたでせう。野菜畑の南には雑木林があつて、その木の間からは監獄署の赤煉瓦が

チラチラ見えるのです。それが又如何にも平和な景色で、一度散歩して、あの嚴めしく大きな、そして潜り戸の低く小さい黒い鐵の門を見た時までは、どうしてもあの綺麗な扉の中に恐ろしい苦役があるとは思へませんでした。

毎朝牛小屋の後の井戸端で顔を洗ひながら見る監獄の赤煉瓦は、始終私に正直と勤勉とを忘れさせませんでした。私は毎朝井戸車に釣瓶繩の軋るやうな牛の鳴き聲でいつでも眼を覺ますのです。それは大抵午前五時でした。その時分もう家は空っぽで、残つてゐるのは若い伯母と四つになる男の子許りでした。伯父は朝の三時頃から、「養神舎」と書いた提灯を點けて、縁を赤く塗つた袖珍の新約聖書を印半纏の懷へ入れて、男達と一

緒に都へ乳を配達に出るのです。

私は顔を洗ふと、絞り立ての乳を一合ぐつと飲んで、伯母が手製の佛蘭西パンで朝の食事を濟ませるのです。それから直ぐ寢間着を一張羅の紺の背廣に着換へて、赤いズツクの靴で冷たい朝の土を踏みながら都へ出掛けるのです。

私は日本橋駿河町の或呉服店へ出てゐました。この呉服店は先づ日本一と言つても恥づかしからぬ呉服店で、今日ではデパートメント、ストアもすつかり出來て實に大したものになりました。その時分はまだそれ程でもありませんでしたが、それでも外の呉服屋に率先して洋服部が出來てゐたので、私はそこへ通ふ事になつてゐたのです。ちやうど伯父が北海道にゐる時分、

私も向ふへ行つてゐて、札幌で或獨逸の婦人に道樂半分洋服の仕立を三年許り教はつたのが、東京へ来て糊口の道になつたのです：：巢鴨の乳屋から駿河町の店へ出ると、世界は實に雲泥の相違で、自分も一生懸命に勉強して早く立派な店を持つやうにならなければ駄目だと、いつも然う思つたものです。

その時分はまだ巢鴨まで電車がありませんでしたから、本郷四丁目まで歩かなければなりませんでしたが、私はお天氣だと埃が立つし、雨だと泥濘のひどい、あの板橋街道といふ奴が大嫌ひでしたから、宮下町から西丸町、西丸町から原町、原町から西片町と、裏通り裏通りをよつて、大學の前まで出るやうにしてゐました。毎朝きつと原町の八百屋の前で青く塗つた箱車を

引いて町から歸つて来る伯父に會ひました。伯父はきつと片手に車の梶棒を握りながら、片手に小さな聖書を廣げて、それを讀みながら歸つて來ました。八字髯に印半纏といふのが既に可笑しいのに、それが本を讀みながら車を引いて來るのですから、この邊ではもう有名なもので、近所の子供などは伯父の姿がちよいと遠くに見えるが早いか、『やあ、髯の乳屋さんが又來たよ。』などと叫つたものです。けれども伯父は一向平氣なのです。私に會ふといつても、『遅れないやうに早く行き給へ。』と言ひますが、それもそれつ切りで、直ぐ又聖書に眼を落して、ガラガラ車を引きながら行つて了ふのです。私はどの位この伯父に勵まされたか知れませんが。

家を出てから西丸町に掛るまでは、まだその時分は家もあんまり有りませんでししたし、畠や野原に四季折折の移り變りも見えて、實に好い道でしした。

家を出ると直ぐ右手の小高い畠の中にノアの箱船でも見るやうな家がありました。柔術か擊劍の道場でもあるやうな木造の細長い建物で、所所に高く窓が開いてゐるのです。そして玄關の丁度上に物見櫓のやうな小さな二階が附いてゐるのです。汽車の機關車の煙突を見るやうに、先の方だけがヒヨコンと持上つてゐるのです。英語の「L」といふ字に似た建築なのです。曲尺を横にして立てたやうにも見えるのです。

この妙な家に妙な人が住んでゐました。昔亞米利加で二十何

年學問をしたとかいふ豪い學者で、時時基督教に莊子とエマアソンとを加へたやうな宗教上の説を小さな本に印刷して、知つてゐる人にだけ配つてゐました。決して賣るのではないのです。伯父は時時この學者を訪問して、よく然う言つて本を貰つて歸つて來ましたが、その本は逆も私共には分らないやうな難しい文章で出來てゐました。

この學者はその時分もう六十幾つでしたが、私は一度もその姿を見る事が出來ませんでした。私などと同じやうに朝早く都を出て、日が暮れてから家へ歸るのださうですが、毎日東京へ何をしに行くのか、それは家の人も知らないのださうです。勿論唯遊びに行く譯はないのですが、さりとて學校の教師になつ

てゐるといふ譯でもないのださうです。唯フラリと出てはフラリと歸つて來るのださうです。歸つて來ると直ぐ物見櫓のやうな二階へ閉ち籠つて頻に何か勉強するのです。私は夜家へ歸る時によく、この箱船の物見櫓に燈の點いてゐるのを見ました。道場のやうな所には誰も住んでゐるのではないのださうです。或時或田舎の青年が、この學者の名を聞いて、弟子にして呉れと遙遙尋ねて來た事がありました。學者は直ぐと許して、青年をその道場のやうな所に寝かしたさうです。丁度十二月と一月の間で筑波嵐が寒い寒い時分でした。青年は幾日かその廣い寒い道場に寝ましたが、とうとう七日目に逃げて了つたさうです。寒い風が吹き通すだけなら未だしも、雨が降ると遠慮もなく洩

るのださうです。

學者の家の人は一人もこの箱船には住んでゐないので。直ぐ隣に當り前の日本の家を建てて、そこに住んでゐるのです。

賄なども全く別で、學者は例の二階へ何もかも持込んで、そこで自炊をして暮らしてゐるのださうです。

この不思議な家の前を通つて少し行くと、一萬坪許りの明き地がありました。夏の初めにこの明き地の側を通るのは、私の樂しみの一つでした。野生の雜草が思ふ儘に生ひ延びて、天然の芝生のやうに見えます。この原の緑は如何なる緑にも優つて美しく見えました。唯美しいと言ふ許りではありません、凡そ緑といふ色なら如何なる種類の緑もこの原に含まれてゐるやう

に見えたのです、それ程この野原には數多くの草が生えてゐました。

花も美しいのが澤山に咲きました。小さいのでは、白い天鷲絨で拵へて黄色の繪の具をちよいと附けたやうな驚苔が、私は好きでした。踊子草も色は映えませんが、形が面白いと思ひました。小豆色の羅紗かフランネルを切つて、あの花の形を拵へて見ようとした事も度度ありましたが、中巧く行きませんでした。露草の花も色の調子が如何にも好くて私は好きです。淺黄とか瑠璃とかいふ色は、日本では得て卑しくなるものですが、露草のは如何にも品が好く行つてゐます。この外、鳴子百合といふ象牙で出来たやうな花もありました。浦島草といふ西洋の

パイプのやうな花もありました。

この明き地を通り越すと、兩側が桃畑で、道の左右に大きな櫻の木が並んで植わつてゐる所へ出ます。この間は凡そ二町許りでしたが、兩側から櫻が枝が生ひ被さつてゐるので、自然のトンネルのやうになつてゐました。近所でもここの事をみんな『櫻のトンネル。』『櫻のトンネル。』と言つてゐました。

櫻のトンネルの下を通るのも、私にとつての愉快の一つでした。若葉青葉の時分の生き生きした緑の反射も然うですが、冬の夜店から歸る時分に、悉く葉の落ちた細い枝と細い枝とが、複雑なレエスを見るやうに、透き通つた空に交り合ひ纏れ合つて見えるその奥に八日位の月が寒く光つて見える景色などは何

とも言へませんでした。

桃の花の盛りに、兩側の櫻の幹を通して、それを眺めるのも一興なのですが、私は自分が餘り桃を好かぬ勢か、それ程にも思ひませんでした。やはり好かつたのは櫻の花の盛り時分です。朝櫻の心地好さは、一度向島か荒川の堤を朝早く歩いた事のある人は知つてゐる筈です。もう咲いた花も、まだ咲かぬ蕾も、みんな露を含んで、微風にハラリ——ハラリと間を置いて散る雫が桃色に光つて見えるのも朝です。小鳥が囀りながら櫻の中を潜り抜けると冷たい花瓣が二つ三つ落ちて来て、頬だの手の甲だのにヒヤリとするのも朝です。

併し私は夜が一番好きでした。月夜の美しさは誰でも知つて

ゐます。薄曇りの夜、櫻のトンネルの下を通ると、蓋ひ被さるやうになつた花の團りが、雲のやうに、また綿のやうに見えるのです。花の光で四邊が桃色に明るく見えるのです。そしてトンネルの途中まで行くと、何とも言へぬ温かい氣が、頭から私をふうわりと包みます。私はそれを薄桃色の練絹のエエルでも被せられるやうに感じたものです。

或春の事。さう言つた薄曇りの晩が幾日か續いた時に、私は毎晩のやうにこの櫻のトンネルの中で不思議な年寄の夫婦に會ひました。私がこのトンネルに掛るのは大抵夜の十時でしたから、場末の事ではありますし、もう人通りは絶えて無いのです。薄暗いので好くは分かりませんが、夫婦は何れももう六

十位で、お爺さんもお婆さんも髪の毛が眞白でした。併し二人とも腰はまだシャンとして少しも曲つてゐないのです。お爺さんはいつても汚いチャンチャンコを着てゐました。お婆さんはいつても可愛い赤ん坊を搔卷で負ぶつて、大事さうに両手を背中へ廻してゐました。

始めはこんなに夜遅く何處へ行くんだらうと思ひましたが、毎晩毎晩會ふので、遠くへ行くのではないと言ふ事が分りました。段段氣を附けますと、何處へと目的があつて歩いてゐるのではない様子なのです。どうも唯散歩でもしてゐるやうな様子なのです。

お爺さんとお婆さんは、いつでもトンネルの奥の方から低い

聲で、ゴトゴトゴトゴトと頻りに何か話しながら出て來るので、私が段段近づくくと、段段聲が低くなつて、私が眼の前へ來るとばつたり話を止めて了ふのです。さて擦れ違つて、私が段段二人を遠ざかると、またゴトゴトゴトと話を始めるのです。その話が如何にも綿綿としてゐて、夜が明けても日が暮れても、明日になつても明後日になつても盡きさうもない様子なのです。

夜夜中に、生れてまだ誕生にもならぬ程の赤ん坊を背負つて、六十にもならうといふ年寄夫婦が散歩をしてゐるのですから、何か譯があるに違ひないと私は思ひました。私はどうかして二人の話を知りたいと思ひましたが、それはどうしても駄目でした。

た。二人は私の姿を見ると、言ひ合してでもあるやうにきつと黙つて了ふのです。そして私が十分擦れ違ふのを待つて、私の後で話を始め出すのです。さうかと言つて、まさか後戻りをしなして後から話を聞く譯にも行きません。私はこんな餘計な事で大分頭を痛めました。氣になつて氣になつて仕方がなかつたのです。

或晩歸りのいつもより遅くなつた事がありました。麴町の或大使館にファンシイ、ポオルがあるので、在留外人のお得意から埃及風だの土耳其風だの希臘風だのの衣裳の注文が一度に來たので、コスチウムの歴史を調べたり何かしてゐた爲に、いつもより一時間許り店を出るのが遅かつたのです。

何の氣なしに櫻のトンネルへ掛りますと、年寄夫婦が私の直ぐ前を歩いてゐるのです。いつもは向ふからこつちへ向いて來るのに、この日は私に背中を向けて、私の行く方へ歩いて行くのです。私の時間が遅かつたので、丁度二人の歸る所によつたのです。私は巧い機會を得たと思ひました。

二人は相變らずゴトゴトゴト小さな聲で話しながら行きます。お婆さんの搔卷から色の白い首を出した赤ん坊は、櫻の花の薄白い光を眞面に顔へ受けてすやすやとよく眠つてゐる様子です。お婆さんは瘦せた白い手で赤ん坊のお尻の所を抱へるやうにして、心持身體を左右に揺りながら歩いて行くのです。お爺さんは下駄を引摺るやうにして歩きながら、自分の前をち

ツと見た儘、お婆さんの顔も見ずに、何かゴトゴト言つてゐます。

私はそつと登音を盗んで、氣の附かないやうに、段段二人の側へ近づきました。トンネルの途中まで来ると、私はもう年寄の直ぐ後へ来ました。

話が聞えます。断断ですが聞えます。

「何處へ行つたらう。」

「何處へ行くものかね。あの赤い煉瓦の中にあるのさ。」

「今頃は何をしてゐるだらう。」

「生んだ子供の夢でも見てゐるだらう。」

「子供に罪はないな。」

「子供に罪があるものかね。」

「情と情とが縫れ合つて子供が出来たんだ。娘も無けりや、あの男も無い。」

「だから子供は綺麗だと言ふのさ。この子は悪者の子ぢやない。誰の子でもない。美しい情の中から生れた子だよ。天の子だよ。」

「あんな悪い男だつて、娘を思つたのは本當に思つたんだ。當り前の人間に負けない位娘を思つて呉れたんだ。」

「娘が又あの男を思つたのにも無理はないよ。あの男の商賣が分つた時、娘が思ひ切つたら、鐵の門の中へは這入らないで済んだかも知れないのだよ。その代り一生情のない女にならなけ

ればならなかつたんだよ。』

『情のない女だと。情がなけりやあ女ぢやない。』

『だから女でなくなる所だつたと言ふんだよ。地獄のやうな所で、男のやうに働いてゐても、娘はやつぱり女だよ。』

『女でゐて呉れ、いつまでも女でゐて呉れ。お前が残した情の固まりは俺達がいづまでも……。』

お爺さんは涙聲になりました。私にはまだ十分様子が知れませんでした。私に何となく誘はれて胸がドギドギして來ました。覺えず石に蹴躓きますと、年寄夫婦はびつくりしたやうに私の方を振り返りましたが、それつきりもう何にも言はなくなつてしまひました。

私は少し極りが悪くなつて、急いで二人を追ひ越しました。トンネルを出て、明き地を通り越すと、振り返つて見ました。二人はやつぱり後から歩いて來ます。

私は又歩き出しましたが、例の箱船のやうな家を通り越すと又振り返つて見ました。二人は段段箱船のやうな家へ近づいて來ましたが、やがて姿が見えなくなりました。

箱船へ這入つたのか、住居の方へ這入つたのか、それは好く分りませんでした。まさかそのお爺さんが例の學者なのでありますまい。使はれてゐる爺さんか何かなのでせう。併し、それにしては言ふ事が少し深過ぎました。

家へ歸つて考へて見ると、二人の話はほんとに二人がしてゐ

た話なのか、自分の耳の中にひとりで湧いて来た話なのか、分らなくなりました。二人の姿も夢のやうで、實際ああいふ人が歩いてゐたのかどうか怪しくなつて来ました。總てが夢のやうなのです。

その晩きり年寄夫婦は櫻のトンネルに姿を見せなくなりました。秘密の袋は少し口を發けて又口を閉ざして了つたのです。

併し私にはその晩の事が忘れられませんでした。正直と勤勉との外に世界はないと信じてゐた私もその晩からはまだ外にも世界があるなとつくづく思ふやうになつたのです。

トンネルの櫻が散り始める時分、私はそこを通りながら、いつも年寄夫婦の身の上を思ふのでした。年寄夫婦と赤ん坊との

關係は、いつまで経つても分りませんでした。二人が花曇りの夜に取り交した語の斷片は深く私の頭に彫りつけられて了つたのです。

サラサラサラサラサラと限りもなく降つて来る花の勻に包まれながら、私はそれから毎晩のやうに、「情の世界」を思ふのでした。

後こ
う

悔く
い

色色厄介になつた。

あれから半分夢中で中へ歸つた。歸ると、直ぐ床をとらして、夕方まで寐た。今起きて、湯へ這入つたが、まだ頭が重い。とても飯を食ふ氣になれない——胸の所に何か大きなものがつかへてゐるやうで、苦しくつて堪まらないんだ。

そこでこの手紙を書く、この長い——多分長くなるだらう——手紙を書いたら、少しは息が自由に出来るやうになるかも知れない。

總てを正直に言ふ。今朝、君の内を出る時、僕はまだ君の言葉に服してゐなかつたのだ。夜通し眠さうな顔一つしないで僕の爲に説いて呉れた君の熱心に對して、義理にも僕分らない。とは言へなかつた。そこで君の前では「分つた、分つた。」と、さも感心したやうに言つてはゐたものの、腹の中では少しも服してゐなかつたのだ。

併し、あれから歸り道によくよく考へて見た。歸つて、寐て、起きてから又考へて見た。やつぱり君の言つた事は本當だ。眞

理だ。今になつて漸くそれが分つた。

實を言ふと、ゆうべ僕が君を尋ねたのは、僕のたつた一人の友達に、自分の苦しい胸の中を打明けて、同情を寄せて貰ひ、一緒に泣いても貰ひたかつたからだ——僕は自分の「哀れさ」を訴へに行つたのだ。

君の内の、あの狭い階子段を上る時、僕はさう思つた。木原はきつとおれの荷物を半分背負つて呉れるだらう——ことによると全部背負つて呉れるかも知れない。この階子段を降りて歸る時、どんなにおれの肩は軽くなつてゐたらう。

ところが、君はちツとも憫んで呉れなかつた。憫んで呉れぬのみか、僕はあべこべに罵られた、怒られた——頑固親爺にて

も叱られるやうに叱られた。

行きなり君に罵倒された時は、僕、實際君を恨んだ。木原は無情な男だ、冷淡な男だ、残酷な男だと思つた。僕があの時泣いたのは、自分の罪を悔いたからではない、君の言葉に感動したからではない。口惜しかつたからだ、腹が立つたからだ……腹の中が煮えかへる程口惜しかつたからだ。

何も僕が悪い事をした譯でない。悪い事をしたのは寧ろ先方ぢやないか。僕が捨てたのぢやない。女の方で總てを犠牲にするだけの勇氣がなかつたんだ。罵るなら女を罵るが好い。僕の罵られる譯は少しもない——と、斯う思つたんだ。

僕は決して世間に恥るやうな行爲をしたのではない。あの人

が氣に入つたから、氣に入つたと言つたんだ。すると向うからも、あなたが氣に入つたと言つて來たんだ。そこで、伯母に頼んで、先方の家へ正式に結婚の申込をして貰つたんだ。ところが、先方の親にそれを斷られたんだ。事件は斯くの如く簡単にして、しかも清潔だ。この間に何等の秘密も無ければ、何等の醜悪もない。

僕は生命を賭してもと思つてゐた事だ。女にもその位の覺悟はあると僕は信じてゐた。ところが女は一も二もなく親の意志に従つて了つたんだ。事件は餘り簡単に破れて了つた。

僕は世の中の事が餘り簡単に解決されるのを見て、悲しくなつた。悲しくつて、堪まらなくなつた。

それから君の所へ訴へに行つたんだ。そして、君に罵られたんだ。

僕は未練らしく同じ事を幾度も言ふ。過つて瀬戸物を毀した人が、毀れた瀬戸物のかけらを、幾度も繼ぎ合はして見るやうに……僕は慰藉を得るだらうと思つて、君の所へ行つたんだ。ところが、餘計に苦痛を得て歸つて來た。僕は頭が軽くなるだらうと思つて、君の所へ行つたんだ。ところが、却つて頭を重くして歸つて來た。

君は戀を憧憬だと言ふ。憧憬が無くなるのだと言ふ。Kが他の人の妻になるのも、僕の妻になるのも、僕が戀を失ふ點に於いては同じ結果だと言ふ。人の妻になれば戀が破れて、自分の

妻になれば戀が成るやうに思ふのは大變な間違ひだ。人の妻になると戀が破れるやうに、自分の妻になつても戀は破れるのだ。結婚——この瞬間に戀は終局を告げるのだ。自分の物にならないのが戀だ、自分の物になつたら戀ぢやない。だから、女が獨身で一生を通さうとしない限り、戀する男はきつと一度は失戀の苦味を嘗めなければならぬのだ。女を思つて、その女と一緒に緒にならうとする男は、自分で自分の戀を破らうとしてゐるのだ——君はこんな事を言つた。

併し、戀は思想ぢやない、觀念ぢやないと言ふと、君は又言つた——では、君の信ずる神は思想かい、觀念かいと。そこで僕は答へた——無論、僕の信ずる神は、思想でもなければ觀念

でもない。一個の存在だと。すると君は、そんなら君は神の手を握つた事があるか、神の唇を吸つた事があるか、神と一緒に寝た事があるかと聞いた。そんな経験はないと僕が答へると、それ見給へ、戀は神と同じ物だ。觸れない所に直打があるのだ。掴めない所に深さがあるのだ。神は人の物になる憂がないから、信仰といふ憧憬は永久に破れる心配がないけれども、女は人の物になるのが當り前だから、戀といふ憧憬は破れるのが普通だ。虹はきつと消えるものだ。その消える筈の虹が消えたと言つて泣く奴があるか、そをかく奴があるか。世間ではさういふ人間を詩人といふさうだが、僕には常識の足りない馬鹿者としか見えぬ、と君は散散に僕を罵倒した。

僕は口惜しかつた。實際口惜しかつた。僕は實際生活の上で苦痛を受けて君の所へ行つたのだ。精神にも肉體にも實際病を得て君の所へ行つたんだ。それを君は一場の議論で片づけて了はうとするのだ。唯ふらりと僕が君の所へ遊びに行つて、そこで君と僕との間に偶然湧いた議論か何ぞのやうに、君はこの實際的事件を取扱つてゐたのだ。さう思ふと僕は君が恨めしくつてならなかつた。

併し、段段考へて見ると、向うの理窟は本當らしい——いやらしいと言つては濟まぬ。確かに本當だ。僕の飽く事を知らない Sehnsuchtは、たとへKを我物にして満足しない。Kの奥の奥の奥にある或物を掴むまでは決して満足しないと思ふ。Kに果し

てそれ程の深さがあるかどうか、それも怪しい。よしそれ程の深さがあつたとしても、その深い深い底に僕が慕つてゐるやうな或物があるかどうか、それも怪しい。だが、議論は議論だ。

議論が僕の實際上の慰藉にはならない。
 僕の今の苦痛が、Kに對する單なる未練でないといふ事は君もよく知つてゐる筈だ。一も二もなく親の命令に盲従して、親の意志なら、自分の嫌ひな男の所へでも嫁に行かうとするやうな女に何で未練があるものか。僕の今の苦痛は、愛の目的が急に無くなつたので、その愛の重荷に壓れてゐる苦しみだ。注ぐ所のない愛情を背負つて歩いてゐる苦しみなんだ。目的が消えて、憧憬だけ残つたのだ。この愛情をどうしよう、この憧憬を

どうしよう。これが實際上の問題なんだ。

君はこれに對して實際上の方法を教へて呉れた。併し、君の教へて呉れた方法は、一層僕の胸を狭く苦しくした。僕は非常な侮辱を受けたやうな氣がした。

僕が本當に口惜しくて泣いたのはこの慰藉の方法を君から與へられた時だ。

君は僕の事を何でも知つてゐて、古い事から新しい事まで何でも知つてゐる。祕密な事でも公な事でも知らない事はない

——殊に君は僕の舊惡を知つてゐる。
 僕は二十一歳の今日までに、本能の衝動に驅られて幾人かの女を汚した。その間に戀もなければ何もなかつた、ただ本能が

形にあらはれた丈だつた。それを君は知つてゐる。

僕が基督教へ這入つたのも、その舊惡に責められたからだ。或牧師の姦淫に關する説教を聞いて、地獄の火で心臓をジリジリ焼かれるやうな氣がしたのだ。そこで、僕は「悔い改め」をした。神の前に總ての舊惡を懺悔した。懺悔する時は、からだ中の汗を絞られるやうに苦しかつたが、それからの僕の生活は極めて幸福だつた、極めて愉快だつた——それでもう總ての罪は拭つたやうに思つてゐた。それも君は知つてゐる。

間もなく、僕は同じ教會へ來るKを戀するやうになつた。生れて始めて戀をしたのだ。女の味は知つてゐても、戀の味は全く知らなかつたのだ——既に女の味を知つてゐる僕の戀は、ま

だ女の味を知らない人の戀よりも遙に神聖だつた。それも君は知つてゐる。

その戀が破れたので、僕は君の所へ訴へに行つたんだ。ところが君の僕に與へて呉れた慰藉の方法は、僕の舊惡に關するものだつた。

君は僕が關係した女の内から、最も不幸な境遇にゐる者を抜いて、この際それを僕の妻にしろと言ふ。一人で自分の憂ひを消さうとするのは消極的だ。進んで人の憂ひを背負つて遣れ、然うすれば自分の憂ひが自然に無くなるからと言ふ。

何といふ難題だらう。僕は實際難題だと思つた。戀を失つた代りに、戀のない女を娶る——そんな不條理な事がどうして出

来るものかと思つた。そんな事が何で慰藉になるものかと思つた……

僕は言つた。けれども、それはもう一度神の前で悔い改めた事だからどうか許して呉れ給へ、外の事なら何でもするからと。すると君は言つた。神の前で口先ばかりの懺悔をした所で、それが何の「悔い改め」になるものか。君が犯した女の一人を救つてこそ、君の懺悔が懺悔になるのだ。それを實行して、初めて君は「雪よりも白く」なる事が出来るのだ。君の持つて行く所のない憧憬と愛情とは、宜しくその「神より與へられた妻」に向つて注ぐべしだ。

僕は再び過去の罪の呵責に逢ふやうな気がした。一度責めら

れて、それに対するだけの償ひをして、それで済んだ積りでゐた罪の爲に、二度責められるやうな気がした。僕は不當だと思つた。神は餘りに厳し過ぎると思つた——

さう思つて僕は君の内を出たのだ。

併し、歸りながら、又歸つてから、段段考へて見ると、如何にも君の言ふ事は道理だ。君の與へて呉れた方法は、一寸實行がむづかしいやうだが、思ひ切つて實行さへすれば、僕は存外幸福な人間になれるかも知れない。

成程 Love には Lost あるのみかも知れない。たとへ好いた女を自分の妻にし得たところで、そこに戀の満足は涌いては來ない。して見れば、戀は思なものだ。幾多の束縛があり、幾多の窮屈

があらうとも、妻といふもの程神聖で楽しいものはあるまい。僕は今まで戀と妻とを一緒にして考へてゐた。君に説かれて、初めてそれが全く別の物であるのに氣がついた。僕は潔く戀を捨てよう、そして妻を取らう。ああ、妻、妻。これ程確實堅固な幸福が外にあらうか。

さて、妻には如何なる女が好いてあらうとなると、君の説だ。僕が嘗て汚した人の内で最も不幸な境遇にゐる者を娶るといふ事だ。僕にとつて、これ程好い選み方はない。これ程立派な爲事はない。僕も決心をするまでには随分躊躇した。父や母がどういふだらう。親類がどう思ふだらう。世間で何と言ふだらう。と、色色に考へた。併し、その社會的の「辛さ」を堪へてこそ、

僕の懺悔にも意味が出て來るのだ。僕自身の革命と社會者とは何の關係もない筈だ、何の交渉もない筈だ。

女の學問をどうしよう、人格をどうしよう、一時はこんな事も考へた。併し、それは自分が全力を擧げて教育すれば、どうにでもなる問題だ。却つて生じツカ教育のある者より無い者の方が取扱ふには好いかも知れない。

僕はやつと決心がついた
そこで、僕は君に、僕の娶らうとする女の事を告白しなければならぬ。君は概括的に僕の罪惡を知つてゐるけれども、特殊にはまだ知つてゐない事が澤山ある。

僕の關係した三人の女の内で、僕が最も不幸な境遇に居ると

思ふ女は、名を神山きたと言ふ。僕より四つ年上の女だ。君は覚えてゐるか。僕の内がまだ麻布にあつた時分、僕の内半年程ゐた人だ。

盛岡の人だつたが、早く母に別れた。父はあるが、不治の病で腰が立たない。それでも自分は教育を受けて學問で父を養はうといふ健氣な志を立てて、父を伯父の家へ預けて一文無しで東京へ出た。

そして、あの五番町の女學院へ學僕に這入つた。初めは大層親切にして呉れたさうだが、半月も立たない内にひどい取扱ひやうをされるやうになつた。院長の女史の顔は君も番町にゐた時分見て知つてゐるだらう。薄痘瘡のある、丈の低い、小

さな女さ。十六の時から亞米利加で教育を受けたとかいふので、大した見識だ。あの先生に虐待されたんだ。

學問なんか少しだつて教へては呉れやしない。朝から晩までこき使つて、それで食ふ物も碌に食はせないのださうだ。飯を食ふ時は一一あの洋服を著た薄痘瘡が臨検して、何杯以上喰べてはいけないとかいふ事まで干渉するんださうだ。まあ、給金なしの下女扱ひだつたんだね。

それを可哀さうに思つて僕の母へ世話をしたのは、麴町の卵屋の小僧だ。何でも仙公とか何とかいふ十八位の小僧だつた。

女學院にも僕の家にも出入だつたんだね。

僕の母はあいつた人間だから、話を聞くと涙をこぼさぬ許

りに可哀さうがつて、あしたにも内へ引取つて遣らうと言ひ出した。子供の世話を見てさへ呉れば學費位はどうにかするとまで言つたんだ。

仙公は直ぐ先方へ行つて、その話をすると、向うも涙をこぼさぬ許りに喜んで、早速女學院の方は暇をとつた。

僕の内へ遣つて来たのは、何でも夏か秋かの晩だった。初めて母から引き合はされた時、その女の人はラムプの火影に小さくなつてゐた。母が斯ういふ可哀さうな女を助けるのは、度度の事だから、僕は別に珍らしいとも何とも思はなかつた。極めて冷淡なものだった。『ああ、さうですか。何分、宜しく。』と言つた丈で、その人の顔も碌に見ずに、自分の部屋へ歸つて了つ

た。

初めて顔を見たのは、その明くる朝だったと思ふ。僕が起きて、湯殿で顔を洗つて、部屋へ歸ると、その人が朝飯を持つて来て呉れて、お給仕をして呉れた。

誠におとなしい、口敷を利かぬ、親切らしい人だ。さういふ不幸な境遇にゐる人にも似合はず、顔は丸丸と肥つて、色が白い。少さうな髪の毛を引ツつめて束髪にしてゐる所は何となく見すばらしかつたが、眼には何とも言はれぬ女のやさしみがあつた。着物も粗末ではあるが、たしなみが好いかして、何となく身綺麗だった。

神山さん——僕等はこの人を斯う呼べと母から命ぜられた—

—の僕に於ける第一印象は斯ういふ風で、誠に感じが好かつたんだ。

神山さんは主として女の同胞の方の世話をしてゐたので、僕はしみじみ話をした事も無かつた。顔を合す機会さへ少かつた。それに、その時分の僕は、中中貴族主義だつたから、内に居候をしてゐる女などと口を利くのは汚らはしい位にも思つてゐたのだらう。

(だから、神山さんについての僕の記憶——殊に精神上の記憶——は甚だ貧しい。)

それでゐて、僕は段段神山さんに近づいた。どういふ風に近づいたか、それは僕、全く覚えてゐない。食物に飢ゑてる者が

食物に手を stretch out するやうに、僕は神山さんへ手を stretch out したのだ。兎に角、人間的でなかつた事は確かだ。全く獸的だつたには違ひない。

前後の顧慮も無かつた。善悪の判断も無かつた。責任の觀念も無かつた。本能が gushing out したんだ。智も情も意もない肉ばかりの僕になつたんだ。

或晩、夜中にフと眼が覺めた。

便所へ行かうと思つて、暗闇を手探りに茶の間を通り抜けようとした。

すると、僕の足の先が、……
僕は立て續けに嚏を二つ三つした。

まあ、強て記憶を呼び起した所で、覚えてゐるのはこの位な事だ。

神山さんは實際苦しい境遇にゐた。こんだ僕の内を出されれば、もう行く所は何處にもなかつたんだ。だから、自分は厭だと思つても、少し位な事は我慢しなければならなかつた。それに、僕の母が殊の外やさしく、着物にも學費にも出来るだけの事はしてゐたから、その親切にほだされた所もあつたのだらう。僕は多少その虚に乗じたといふ所があつた。その恩を笠に着て、我意を通したといふ所があつた。それを思ふと、僕はいつでも胸を掻き窺られるやうな氣がする。

僕はそれを好い事にして、思ふ様自分勝手に働いた……神山さんの人權に對しては僕全く盲目だつたのだ。斯くして僕等の——僕等のは言へないかも知れない。先方の意志は全く分らなかつたのだから——關係は幾月か續いた。僕はあらゆる智慧をふるつた。巧に隠れた。だから、内の者でもこの事に氣のついた者は一人だつてありやしなかつた。やがて神山さんの國の阿父さんが大層悪くなつた。これを預つてゐる伯父さんが病人を邪魔にして大層虐待をするといふ知らせが餘所からあつた。間もなく、危篤といふ電報が來た。

神山さんは取る物も取り敢ず、國へ歸つた。

神山さんは、もうそれツ切り東京へ出て來なかつた。

歸つて見たら、父の容態は左程でもなかつた。やツぱり伯父が面倒になつたので、そんな事を言つて寄越したのだらうといふやうな手紙が來た。

もう一度是非上京して御厄介になりたいのだが、前に申し上げたやうな事情で、父も伯父の家を出たし、又二人で家を持つやうになつたので、當分は上れさうもない。御厄介になつた事は死んでも忘れない。お子様方の御成人を祈る——やがて又こんな手紙が來た。

それから、度度母へは便りがあつたやうだが、ただ段段親

父の病氣はよくなるばかりだから安心して呉れといふやうな事はばかりだつたらしい。

やがて、その便りも全く絶えて了つた。

便りが絶えてから……もう三年になる。

僕の罪惡は無言に始まつて無言に終つて了つたんだ。闇黒裡に生れて闇黒裡に生を終つて了つたんだ。神と神山さんと僕との外、その罪惡を知る者はないんだ。僕はもう濟んだ事だと思つてゐた。

ところが、その古い罪惡を、神は今君を通して責め給ふのだ。僕は苦しい。堪らず苦しい。忘れてゐた古い傷をナイフでせせられるやうな氣がする。

併し、僕は自己を救ふ爲に、この苦痛に勝たなければならぬ。この苦痛に勝つには、君の言ふ通り具體的の懺悔をしなければならぬ。

僕は「負ひ目」を負はなければならぬ。十字架につけられなければならぬ。手の甲と足の甲とを釘で打ちつけられなければならぬ。

僕は血だらけになつて、初めて救はれるのだ。僕は死んで初めて生きる事が出来るのだ。

僕は殉教者の心を以て、神山さんを救はう。神山さんの前に總ての罪を謝して、その罪の償をしよう。神山さんと一生を共にして、神山さんの父をも幸福にしてやらう。

そして、神山さんを通じて、僕の汚した他の婦人達に罪を謝さう。

僕にして若しこの試煉に堪へ通す事が出来たら、失戀の苦悶などは、風にごみの飛ぶやうに、何處かへ飛んで行つて了ふだらう。

ああ、君は好い事を教へて呉れた——いいや、君ではない、神が君を通じて教へ給うたのだ。僕はこれを君に謝すと同時に、君を通じて現はれ給うた天なる御神に謝す。

君は自ら常に「不信者」だと言ふ。基督は人物であつて神ではないと言ふ。

併しながら、神はその「不信者」と稱する君をも捨て給はず

後 悔

僕の唯一の友なるが故に、君を通じて僕に現はれ給うた。僕は今更に神の恵みの限りなきを感謝せずには居られない。僕は僕は暫く筆を置いて、黙禱する………

あすとは言はぬ。今夜君へ出すこの手紙を書き終へると、僕は直ぐ神山さんへ謝罪の手紙を書く。

神山さんはきつと聞いて呉れると思ふ。

父や母へは跡で話をすればよい。僕の両親は決して僕のする事に異議は稱へない。それは君も知つてゐる。

この手紙を書いたち、頭がはつきりして来た。からだ中に何とも言へね力が籠つて来た。

最後に、も一度僕は君に感謝する。

四月二十五日夜

繁次郎君

三之助

二

木原君。とんだ事が起つて来た。僕は今更君を恨みはしない。恨むなら自分を恨む。ただ世の中の事が分らなくなつて来た。二月前に出した例の手紙の返事が漸く昨日来た。直ぐにもその趣を君の所へ知らせなければならなかつたのだが、あまり頭が亂れたので、今日になつて了つたのだ。どうか許して呉れ

給へ。

僕の頭は今滅茶苦茶だ。この手紙にも嘸前後する所が多いだらう。それも許して呉れ給へ。

兎に角、先づ事件其者を書かう。

返事は神山さん自身から来たのではない。神山さんの阿父さんらしい人から来たんだ。表にも中にも、ただ「若翁」としてあるだけで、名が書いてないのだ。

神山さんが元の通り不幸な境遇にゐてさへ呉ればこんな事にならなかつたのだ。神山さんは今非常に幸福な生活をしてゐるのだ。

或法學士の所へ片づいてゐるのだ。その法學士は今浦鹽須徳

の〇〇〇にゐるのだ。役の名は分らないが、〇〇〇とでもいふ所らしい。神山さんはその夫人として、それも浦鹽に行つてゐるのださうだ。

僕の手紙は最初神山さんの故郷へ著いて、神山さんの阿父さんの手に這入つた。併し、表にはちやんと僕の名が書いてある。神山さんの阿父さんも當時の恩は覚えてゐるし、その恩ある家の息子から來た手紙だから、さういふ騒動を起しさうな手紙だとは夢にも氣がつかないで、その儘浦鹽へ廻送したのだ。

ところが、不幸にしてそれが神山さんの良人の手に這入つた神山さんの良人は神山さんの前半生については殆んど何も知らない人なのださうだ。

見馴れない聞き馴れない男の名の手紙が來たので、法學士は先づそれを不思議に思つた。やがて、それが疑惑となり、嫉妬となつた。

法學士は、自分の面前で、神山さんにその手紙を読ました。

神山さんは微笑を含んで、何の汚らはしい事が書いてあるものかといふ風で、平氣で手紙の封を裂いたさうだ。神山さんは僕を信じてゐたんだね。

五六行讀むと、神山さんは顔色を變へた。もう手が震へて先を讀む事が出来ない。法學士も顔色を變へた。「讀め、讀め。先を讀め。」と頻に促したさうだ。

神山さんは全身わなわな震へながら、聲も絶え絶えに、それ

でも終まで、どうにか斯うにか讀んださうだ。

勿論、厭な手紙ぢやないのだから、法學士もさう不作法に怒りはしなかつた。神山さんは僕の涙に滴染んだ手紙を、又自分の涙で浸す許りに泣いたさうだ。僕の心を汲んで呉れたのだから、そして、その遅かつたのを悔んで呉れたのだらう。

併し、事件はそれだけでは濟まなかつた。法學士は今まで神山さんを純潔無垢なんだとばかり思つてゐたのだ——僕はさうに違ひないと思つてゐるが——それがさうでなかつたと言ふので、大層歎いたさうだ。

法學士は有名な潔癖家ださうだ。

それでも二週間位は堪へに堪へたのだが、とうとう堪へきれ

ないで、離縁話を持出した。

さうなると、向うは法律家だ。言ふ言がいく事理に適つて居る。流石神山さんの阿父さんも返す言が無かつたさうだ。

併し、兎に角、本人から爲かけた事でない事は、僕の手紙を見ても分るし、それもあの當時の境遇上、是非の分別もつかずにした事でもあらうからといふので、百方神山さんの阿父さんが調停の勞をとつたさうだ。

神山さんも、豫めそれだけの事を斷つて置かなかつたのは私が悪かつた。併し、今更何の面目があつて故郷へ歸れようと、泣いて良人に訴へたさうだ。

法學士は一角の紳士だ。この手紙も誠だ、妻の心も誠だ、妻

の父の心も誠た。誠に動かされない者は誠の者だと言つて、綺麗に自分の持出した離縁話を引込めたさうだ。

「若翁」といふ人——恐らくは神山さんの阿父さん——は昔流の字で、事細かにこれらの事を僕の所へ報じて呉れたのだ。

「今では雨降つて地固まるで、却つて前より幸福に暮してゐるやうですから、その義は御安心下さい。」と書いてあつた。

「あなたも今が勉強ざかりです。もうきたの事などは忘れて、一生懸命に御勉強が肝心です。この後どんな事がきたの片づき

ました先で起りませうと、その責任は私が負ひますから、もう決して御心配には及びません。早く社會へ出て立派なお方にお

なりなさいまし。蔭ながら御出世を祈つてをります。」——こん

な事も書いてあつた。

僕はこの手紙を読み終ると、三度罪に責められるやうな氣がした。道を歩いてゐて、急にあたりが眞ッ暗になつたやうな氣

がした。もう、何が何だか分らなくなつた。

一體、人間はどうしたら好いのだ。離縁をされたのなら、まだ好い。僕はその不幸な婦人を一生

慰める事も出来る。神山さんはもう一生法學士の所にあるだらう。その法學士の

これからの家庭。神山さんの一生。そこに絶えず何等か *loomy* なものが漂はずにはをるまい。

二人は果して今までの通りに信じあつて暮す事が出来るであらうか。果して今まで通り openly に語り合ひ微笑み合ふ事が出来るだらうか。

法學士の家庭には、もう拭いても拭いても拭きとれない汚點が出来て了つたのだ。

法學士の家庭の上には、永久に去來する一團の暗雲が懸つて了つたのだ。

その汚點は誰がつけたんだ。その暗黒は誰が懸けたんだ。

僕だ。僕だ。罪を悔いた僕だ。懺悔をした僕だ。十字架を負つた僕だ。

ああ、人間はどうしたら好いんだ。

自らをも人をも幸福にしようと思つて爲た事が人をも自らをも不幸にして了つた。

僕には世の中の事が分らなくなつた。

僕が悔いさへしなかつたら、懺悔さへしなかつたら、黙つてさへゐたなら——法學士の家庭は永久に幸福だつたのだ。

僕が飽くまで無垢を装つてゐたなら、親友の君に何事も隠してゐたなら、悔ゆべき罪は一つもないといふやうな顔をしてゐたなら——神山さんの家庭は永遠に明るかつたのだ。

神山さんの老人に非常な苦勞をかけたのも、思へば僕の懺悔故だ。

ああ、悔い改め。僕は疑はざるを得なくなつた。ああ、僕に

は神の教が分らなくなつた。

僕は「三度罪に責められるやうな氣がする」と前に書いたやうだ。併し、今の苦しみは、あの古い罪を悔いる苦しきさではない。二月前の手紙を悔いる苦しきさだ。懺悔を悔いるのだ。後悔した事を後悔するのだ。

ああ、僕には分らない。何もかも分らない。

これから僕はどうすれば好いんだ。

失戀の苦痛を救つて呉れる筈の唯一の手段は、斯くの如き滅茶苦茶な結果を生んで了つた。ああ、僕は君が羨ましい。不信者たる君が羨ましい。

ああ、僕はどうすれば好いんだ。

併し、決して君を恨むのではないよ。又君に訴へるのでもないよ。

僕はもうど一人で、どうにでも成るやうに成る。

頭が凝結して了つたのか、もう涙も出ない。

今の感情は、寧ろ笑ひたい。ハハハハ。

六月二十七日夕

日野三之助

木原繁次郎君

捕ほ

縛ばく

手記の一。

お辰の兄が尋ねて来たと言はれた時、俺はヒヤリとした。

きつとあの一件に違ひない。さもなくてお辰の兄が俺を尋ねて来る譯がない。愈お辰の身體に何か變化が起つたに違ひない。若しや若しやと俺の心配してゐた事がとうとう事實になつたに相違ない。

俺は自分の顔色が青くなつたに違ひないと思つた。それでも

俺は態と平氣な顔をして、書生の木村に『應接へ通して置け』と言つた。けれども、自分の聲は慄へてゐるのは、自分にもよく分かつた。

母は、『何だらうねえ。』と心配さうに言つた。『なあに、金でも借りに来たんでせう。』と、極冷やかな調子で俺は言つた、勿論この返事には多少の暗示があつた。

いつも急いで食つて了ふ朝飯を、今日は勉めてゆつくり食つた。そして、食ひながらこんな事を考へた――

とうとう最後の科税が来たんだ。俺はどつちにしても、これを逃れる事は出来まい。俺は子供の時から、seductionといふやうな意味に於いて、随分大勢の女に手をつけた。俺は偶とした事

で、トルストイの『復活』といふ、小説を読んだ事があるが、あの中で一番俺の同感したのは第十七章だつた。カチユシヤの部屋の窓から明りが外へ差してゐるのを、軍服を着て帽子を冠らないネフリユドフが覗いてゐる所を書いたバステルナツクといふ人の挿繪も俺の胸を躍らした。あの章の終りの『It happens to everybody—everybody does it』といふ文句も、嬉しいやうな、恐いやうな心持で讀んだ。俺はネフリユドフの罪惡を幾度も重ねて犯したのだ。併し、今までにはまだ一度もその罪に對する刑罰が來なかつたのだ、科税が來なかつたのだ。俺は罪を犯す度にあとでビクビクした。若し俺の罪惡が實を結んだらどう爲よう。若し俺の無形な行爲が形になつて現れたらどう爲よう。俺は始

終ビクビクしながら、それでもやつぱり俺の罪悪を廢めなかつた。今度こそは刑罰が來るだらう、今度こそは科税が來るだらうと、罪を犯す度にひやひやして來たが、幸にも今までにはまだ一度もそれが來なかつた。どの女もどの女も、俺の行爲を暗から暗へ葬つて、いつともなく俺の眼の前から消えて行つた。俺は生れつき卑怯な人間で、何事をも明らさまに爲る事が出來ない。腹が減れば飯を食ふとか、眠くなれば寝るとかいふ、人間自然の要求を充たすのさへ、俺は人に隠れて爲ようとするのだ。況んや性の慾望といふやうなものに於てをやだ。俺は女といふ者に對して、まだ一度も「買ふ」といふ公明正大な地位に立つた事はない。俺は常に「女」を「盗んだ」のだ。竊盜らし

い事もした。強盜らしい事もした。甚しきに至つては掏摸らしい事までした。これに對してまだ一度も「神」の警察が一人の刑事をも送らなかつた事は、寧ろ不思議な現象である。俺は自分の卑怯な爲に罪を始め、その罪の罰せられない爲に益罪を廣げたのだ。

とうとう刑罰が來たのだ。俺はどうしてもこれを逃げる事は出來ない。今まで幾度となく重ねて來た罪惡が、最後の罪惡に對するだけの科税で濟めば寧ろ安いものだ。この科税はどんなに恐ろしい科税だか分からぬ。併し、たとひどんなに恐ろしい科税であらうと、罪の何十回に對する罰の唯一回なのだ。これをも逃げようとする程、それ程俺は卑怯ではない。好いから檢

事の前へ出て、兎に角宣告を受けて見よう。

一時間程待たしてから、俺は應接間へ這入つた。お辰の兄は狼狽して椅子を立つた。いつものやうに、尖がつた赤黒い鼻の先に度の強い眼鏡が突き出てゐる。その眼鏡の上から、絶えず落ち着かない大きな眼が覗いてゐる。兩方の手は電氣でも掛けられたやうに、絶えず慄へてゐる。この不安な、ビクビクするやうな検事の様子を一目見ると、被告の俺は急に氣が落ち着いて了つた。

『どういふ御用です。』

お辰の兄は、絶えず何かに後から迫られるやうな様子で話し出した。

『實はお辰でございやすが——』

きつとさう来るだらうと覺悟してゐる俺も、この一言を聞く時、背中から冷たい手で撫でられたやうな氣がした。

お辰は俺の家を出てから、下町の或商家へ奉公に行つた。二月三月そこに働いてゐる内に身體の様子が變つて來た。それから兄の家へ歸つて來て、醫者の所へ行つて見て貰ふと、もう五月にもなつてゐると言はれた。お辰の兄が、月を繰つて見ると、どうしても俺の家にゐた間に起つた事に違ひないと言ふ事になつた。お辰の兄は毎日のやうにお辰を責めたが、お辰は中中父の名を言はなかつた。散散責められた揚句、この頃になつて漸くお辰は俺の名を言つた。長い間の恩もあるし、俺の名譽にも

關る事だから、堅く言ふまいと決心してゐたのだが、あまり兄に責められるので、苦しみながら實を吐いたのだ。

お辰の兄は斯ういふ風に話をした。そして事實を打明けたのはお辰の罪ではなくて、自分が餘り責めたので、已むを得ず白状したのだと言ふ風に話した。併し、俺はそんな事はどうでも好いと思つた。平氣で直ぐしやべらうと、濼り濼り言はうと、言つて了つた以上は同じ結果を見るのだ。

お辰の兄は話をしてゐる内に、段段腰が据わつて來た、段段手の慄へが留まつて來た。始めは伏し目に人を狙ふやうな態度だつたのが、いつの間にか、眼を大きくして眞面に俺に襲ひ掛つて來た。

『あなた覚えがありますか。』

『そりや覚えはあります。』

『では、どうにかして下さるのでせうね。』

俺は非常な勇氣を振つて斯う言つた。

『無論どうにかします。併し、どうにかすると言つて、手段は二つしかありません。あれを私の妻にするか、さもなくばあれの身體に傷の附かないやうにして、何處かへ嫁に遣るのです。』

『さうです。その二つしかありません。』

『ところで、あれを私の妻にすると言ふ事は到底不可能です、あれが私の妻になる資格のない事は、あなただつて認めるでせう。器量の事は暫く言ひません。あんな教育の無い者が、どう

して私の妻になれませう。』

『さうですとも。それは私も萬萬お察し申してをります。併し、當人は非常にあなたを慕つてゐるのでございますから、どうか——』

『私を慕つてゐますつて。』

俺は笑はずにはゐられなかつた。お辰は俺を憎んでゐようと決して俺を慕ふ筈がないのだ。俺に眞面目な心があつて爲た事でない事は、お辰だつて好く知つてる筈なのだ。第一俺をほんとに慕ふ者がどうして俺の名を身持の悪い兄などに打明けよう。お辰の兄は好い加減な事を言つてるのだ。と思ふと、俺は腹が立つて來た。

『そんな事はどうでも好うございます。兎に角、私はあれを妻にする事は出来ません。そこで、あれを引き取るより外に方法はありませんが、それではお氣に召しませんか。』

『お引き取り下されば、何も言ふ所はございません。併し、子供ごの始末は——』

『それは何とも只今は申し上げ兼ねます。あなたはあれをどういふ人間だと思つて入らつしやるか知りませんが、私はあれを信用する事は出来ないのです。私は私として償はなければならぬ所があると信じますから、それを償はうとするだけで、生れるものが果して自分の物であるかどうかそれは疑つてゐます。勿論斯うなる以上は決して不人情な事はしない積りですが、そ

これらの事は私の方にお任せが願ひたいのです。」

俺は俺の罪を否定しようとは思はなかつたが、生れる子供を自分のだとは、どうしても信じたくなかつた。それだけはどうしても俺ののではないと言ふ事にして置きたかつた。俺はあんな女との關係を、眼に見える物で見たくはないと思つたのだ。

『御存じでもございませうが、あれは私の家にある間も随分自墮落な生活をしてをりました。勿論、遠縁の者だといふやうな所に多少の勝手もあつたのでせうが、兎に角その日にも差支へてゐるやうなのを、親父の所から引き取つて遣つたのぢやありませんか。それをあれは何とも思はずに、私の母には口答へばかりしますし、私の妹などは自分の家來か何ぞのやうに追ひ

使ふのです。その上私共が夏避暑に出掛けました留守などには、毎晩のやうに何處かの男を引き入れたと言ふやうな噂さへあつたのです。』

俺はお辰の兄を捕まへて、お辰を罵倒し始めた。併し、俺の言つた事は決してみんな嘘ではなかつた。男を引き入れたといふ事だけはどうかと思ふが、その當時さう言ふ噂は確にあつたのだ。俺の思ふには、その時分もう一人家にゐた下女が厭に生つ白い奴で、事に依ると、こいつが引き入れたのではないかと思ふが、出入の八百屋の小僧などは、確にお辰だと言つてゐた。俺はこの際八百屋の小僧の方を信じた方が氣が強くなるから、八百屋の小僧の言つた事を本當だと思はう。

『いや分かりました。』

お辰の兄は、熱して来る俺の言葉を冷やかに遮つた。

『そこで、いつからお引き取り下さいませうか。』

『今直ぐでもと申し上げたいが、一應家の者にも相談しなければなりませんから、二三日お待ち下さい。』

『では明後日では如何でせう。日が好いのでございますが。』

俺は又むつとした。あんな奴をこんな譯で引き取るのに、日の好いも悪いもあつたもんかと思つたのだ。

『明後日と言つて、今直ぐさうはツきり極める譯にも行きませんが、まあさうして置ませう。』

『そこで——』

お辰の兄は、鋭い鎌で草でも薙ぎ倒して来るやうに、どしどし俺の腹ん中へ切り込んで来るのだ——

『そこで、これは私共の勝手と言へば勝手ですが、お辰を引き取りましてから今までの掛りの所ですな、勿論、こんな事を願へた義理ではないのですが、この頃は周旋業の方も馬鹿に閑でしてな。何しろ御存じの通り子供は多いし、どうにも斯うにもアガキが附かないのです。そんなこんなで大分お辰の物も他所へ預けて貰つたやうな譯で、當人もこちらへ來るとなれば、さういふ風な物を持つても來たいだらうと思ひまして——』

『つまり金が入ると言ふのでせう。』

それは勿論覺悟してゐました、と言つて遣りたかつた。

『どの位入るのです。ざッくばらんに言つて貰はうちやありませんか。』

『へえ。別にまだ精算をして見た譯でもございませんが、何や彼や五十圓程は掛らうと存じまして——』

『それで好いんですか。』

『それだけございませば。』

『ちやあ、それだけの物をあなたの方へ上げて、當人をこちらへ引き取れば、それでもうあなたの方に異存はないのですね。』
 俺はもういつまでも話をしてゐるのが厭になつた。どうせ背負ひ込むなら、多くても少なくても同じ事だ。俺は唯一時も早くこの尖がつた赤黒い鼻と總ての關係が絶つて了ひたかつたのだ。

『さうして頂けば、もう異存はございません。』

『宜しい。そんなら今夜七時に又ここまで来て下さい、金を渡しますから、その時、いつ引き取るか、しつかりした御返事をしませう。』

お辰の兄は俺のこの返事を聞くと、眼鏡の上でニコリとした。『では、どうぞ宜しく願ひます。當人も嘸喜ぶ事でございます。實はもう妻に一月も前から伺へ伺へと責められてゐたのですが、まあ出来る事ならこんな事で伺ひたくはないと存じまして、今日まで漸く宥めて來たのでございませが、實はあなた、或方面の宅地賣買で、近頃飛んだ手違ひを致しましてな、もう

どうにも遣り繰りが附かなくなつて了ひましたものですから』
 そんな言ひ譯はどうでも好いと俺は思つた。どつちにしても
 俺は損をするだけの物を損をするのだ。取られるだけの物は取
 られるのだ。

『では、どうか今夜御出で下さい。』

俺は早く歸つて貰ひたいと思つて、斯う言つた。

『畏まりました。併し、この頃は中中お忙しくて結構ですな。』

新聞などで嚴ましい疑獄などには大抵御關係のやうですな。お
 大抵ちやございませうまい。』

『ええ、何ですか。辯護士も若くちやあ世間の信用がないから
 駄目です。では、どうぞ今晚。』

お辰の兄はやつと歸つた。

手記の二。

愈愈金を渡す時、俺はお辰の兄に向つて斯う言つた。

『兎に角、これは親類の間に起つた事ですから、世間へ知れる
 とお互に恥ぢです。又當人の將來の爲にも非常な損だと思ひま
 すから、どうか十分秘密はお守り下さい。私の妻にしない人間
 だとすれば、何れはどこかへ片附けて遣らなければならぬ事
 になります。若しこんな事が世間へ洩れた爲に、當人が一生不
 幸に暮さなければならぬやうな事になると可哀さうですから、
 どうか誓つて他言しないで下さい。勿論、妻君にもお口止めが

して頂きたい。』

併し、俺は決してお辰の身の上を心配して、こんな事を言つたのではなかつた。俺はどこまでも自分が大事だつたのだ。自分の社會に於ける地位が大事だつたのだ。こんな事の爲に俺の一生を草深い田舎か何かで過さなければならぬやうな事になるのは、如何にも堪へ難い。俺はこれッばかりの事で社會的に滅されるには、餘りに尊い身體だ。俺には法曹界に於ける立派な使命がある。俺は十分その使命を果すだけの天分と素養と一刻も休まぬ勉強の精力とを持つてゐる。天は決してそんな事で俺といふ人間を根柢から覆へしては了ふまい。俺はそれに就いて決して天を疑ひはしなかつたが、それでもお辰の兄から證

書だけは取つて置いた——必ず秘密を守ると言ふ證書を。

その晩、俺は母に向つて斯う言つた。

『こつちには丸で覺えのない事なんですけれど、事を荒立てると却て恥ぢになりますから、何でも向うの言ふ通りになつて遣りました。何しろ相手が悪いんですからねえ。そりやあ法廷へ出て争へば、決して負ける筈はないのですが、そんな事をして費用を使つても詰りません、それにお辰の身體に變化が起つてる事は事實らしいのですから、そんな事をして疑ひを受けるだけでも損ですから、兎に角引き取る事にして遣りました。なかに、身體の始末さへ附けば後はどうにでもなりますから、それまでどうか我慢して見て遣つて下さい。ほんとに飛んだ親類を

持ちましたねえ。」

母は飽くまで俺を信じてる様子で、

「あれは前から好くない奴だつたんだよ。太田の伯父さんなんかも、今までに幾度ゆすられたか知れやしないよ。だが、お辰もお辰だねえ、どこでそんな身体になつたらう。あの子も身持の好くない子だねえ。」

と、言つた。

俺は巧に母を欺して了つた。併し、俺は決して悪い意味で母を欺したのではない。俺は母に心配をかけるのが厭だからだつた。母に自分を不孝な子にするのが厭だからだつた。俺は社會に信用を得る基礎は、家庭に信用を得るにあると信じてゐるか

らだ。

手記の三。

今日は愈愈お辰の来る日だ。

俺はお辰の顔を見るのが厭なので、朝早く家を出て了つた。

あの眼の小さな、口の大きな、丈のチンチクリンな、醜惡極まる「女の變態」を見るのは、どうしても俺は厭だ。しかも、それが俺の關係者として現れるのだ。俺の子だといふ物の母として現れるのだ。俺は迎も堪へられない。

夕方、勤を果たしてからも、俺は家へ歸らなかつた。俺は這入りつけぬ料理屋といふものへ這入つて、飲みつけぬ酒といふ

ものを飲んだ。「酒は憂ひの玉箒」などと、好く落語家が言ふが、あれは嘘だ。俺は酒を飲んだ爲に却て頭が苦しくなつて来た。鐵の輪が何かで、肉の食ひ入る程頭を締めつけられて、今にも頭蓋骨が碎けて了ふのではないかと思はれる程、頭が痛んで来た。

俺は苦しみながら考へた。俺は何もこんなにしてまで酒を飲まなければならぬ程の憂ひがある譯ではない。俺は成程悪い事をした。併し、俺はその悪い事に對する償ひを立派にしてゐるのではないか。俺は酒を被つて逃げなければならぬやうな、そんな重い苦痛を背負つてゐるのではない。一體、俺はどうして這入りつけぬ料理屋などへ這入つて、飲みつけぬ酒などを飲

んだのであらうか。

俺の前へ現れた美しい女達も、少しも俺には美して見えなかつた。俺は唯「女」といふ者を見た。常に俺を暗い所へ暗い所へと引きずり込む「女」といふ者を見た。いつも俺に卑怯な事をさせる「女」といふ者を見た。あの見るのも不愉快なお辰といふ奴と同じ種族の「女」といふ者を見た。俺が忘れようとしたお辰の顔は、一層深刻に、一層執拗に、俺の脳髓の内膜に食ひ入つて来た。

車で運ばれて家へ歸ると、家は思ひの外静かだつた。母は俺の命令通り、お辰が來ると直ぐ、近所の産婆の所へ預けて了つたのだ。

母が「産婆」といふ事を言つた時、俺は堪まらず厭な心持になつた。俺の物だか何だか分からない物を、俺の物として引き出す奴である。俺の罪だかどうだか知れない物を、俺の罪として世に示さうといふ奴である。併し、さういふ奴が、仕合せにもこの世界に家といふものを持つてゐて、お辰を俺の眼から隔てて呉れた事は、如何にも感謝しなければならぬ。腐つて行く人間の身體を、土の底で埋めて隠して呉れる墓掘といふ奴に、俺達が感謝しなければならぬと同じやうに。

俺は同じ人を憎んだり愛したりしながら、痛い頭を抱へて寝た。

手記の四。

費用は段段にかさんで来た。出来ない事ではないから、始めは俺も黙つて出してゐたが、終にはそれが厭になつて来た。俺はいろんな口實を設けて、成るべく自分の金を出すまいとした。滋養分を喰べさせなければならぬから、どれだけの金が入る。何とかいふ薬が入るから、それを買つて貰ひたい。やれ、蒲團が入る、布が入る。毎日のやうに様様な事を言つて来るのだ。

残り煩いから、何も彼もそつちで立て替へて置け、後で纏めて片を附けるからと言つて遣つた。小刻みに刻んで、毎日のやうに責任を問はれるのは、如何にも堪へ難い。俺の責任なら責

任で、山のやうになつて、一度に俺に押し寄せて來るが好い。卑怯な魚が釣餌でも食ひ缺くやうに、俺の身體をチビチビ食ひ缺かなくても、俺は俺の責任だけの事はきつと果すのだ。母は毎日のやうにお辰の消息を俺に傳へた。俺は一一それを聞くのが、如何にも苦痛だつたが、母は俺に罪はないと信じてゐるものだから、平氣で色色な話をするのだ。俺も母の前だけでは、苦痛を現すまいとして、努めて冷淡に聞いてゐるやうな風をするのだが、元來我儘の俺の事だから、時時忘れて癪癪を起して了ふ事がある。すると、母はいつでも不思議な顔をして黙つて了ふのだ。

手記の五。

とうとう生れたといふ知らせがあつた。

言ひ淀み、言ひ淀み、母の言ふのを聞けば、馬鹿に顔の長い、頭の大きな男の子だと言ふ。

「僕に似てゐましたか。」

俺は昂奮する神経を無理に押さへて斯う聞いた——努めて冷淡に。

そして笑つた——努めて皮肉に。

『似てるものかね。』

母は捨てるやうに言つた。

その晩、俺は仙臺の方へ旅行に出た。表向きは職業上の出張

だつたが、實は行つても行かないでも好い所へ行つたのだつた。俺は若し家にあるて、赤んぼの聲でも聞いたら大變だと思つたのだ。産婆の家はつひ五六町先だから、夜遅くまで起きてでもゐる時に、若し「自分の子」の泣き聲でも聞いたら、俺は逆も堪るまいと思つたのだ。俺はお辰の兄を追ひ歸してから、出來得る限りそれに關する事を見まいとしてゐるのだ。聞くまいとしてゐるのだ。俺の罪の結果だと言ふ物が、神經を突き破るやうな鋭い赤子の聲になつて、俺の耳の中へ襲はつて來たら、俺は逆もちつとしてゐられなくなるだらう。俺は俺の狼狽する様子を家の者に見られて、家庭に於ける信用を失ひたくないのだ。

手記の六。

俺は今日歸つて來た。威張つて歸つて來た。俺はこなひだどうしてあなんにビクビクして家を逃げたんだらう。どうしてあんなに苦んだり恐れたりしたんだらう。俺は少しも苦しむ事はないのだ。少しも恐れる事はないのだ。俺は科税を拂つてゐるのだ。俺は責任を果してゐるのだ。誰に聞かれたつて恥づる所はないのだ。誰の前へ出たつて恐い事はないのだ。だから、俺は歸つて來た。威張つて歸つて來た。

『子供が死んだよ。』

俺は家の鬨を跨ぐと、直ぐ斯ういふ聲を聞いた。

俺は「それ見ろ」といふやうな心持になつた。やつぱり神は

正しい者に味方をするのだ。俺の物だか何だか分らないやうなもの、いくら俺に押し付けようとしたつて、そんな物は自然と無くなるのだ。お辰やお辰の兄が俺に對する唯一の武器と頼んでゐた物は、見事に自然の手で叩き潰されて了つたのだ。憫れむべき犠牲となつた赤子は世にも不幸な運命を持つたものだ。俺はお辰やお辰の兄のやうな奴に作り出された不幸其者の象徴とも言ひたい赤子の爲に泣く。俺は決して父の知れぬ赤子に對して、親のやうな感情を起して泣くのではない。悪い奴等が憎いから泣くのだ。義憤の涙だ。公憤の結晶だ。その晩、俺は斯ういふ話を聞いた。

産婆の所へ遊びに行つてゐた俺の小さい妹は、赤んぼの死

骸を見ると大層泣いたさうだ。少しも濁りのない清い涙を、少しも曇りのない清い死骸の上に注いだのだ。死んだ子に少しも罪はない、泣く妹に少しも罪はない。俺の爲に死んで呉れたと言つて好い赤子の爲に、俺の小さい妹が泣いて呉れたといふ話を聞いた時は、思はず俺もホロリとした。

『でも好いわ。又今に出来るから。』

無心な妹は、斯う言つてお辰を慰めたさうだ。

『又今に出来る。』

無心で言つた妹の言葉は、百雷の一時に落ちるやうな響きで、俺の心臓を脅かした。俺は太い鐵の棒か何かで、身體の何處かを碎ける程に打たれたやうな氣がした。

『又今に出来る。』

恐ろしい言葉だ。氣味の悪い言葉だ。俺の運命を宣告するやうな言葉だ。俺は暫く慄へが止まなかつた。
『又今に出来る。』

手記の七。

顔を見るのも不愉快な女が、又俺の家へ来る事になつた。

産後の衰へは醜い女を更に醜くした。この醜い女の弛んだ皮膚の何處かに、醜い罪惡の痕跡があるかと思ふと、俺はもう指一本でもこの女の物を見るのが厭になつた。

家へ來た當座、お辰は人が變つたのかと思はれる程大人しか

つた。何となく萎れたやうな風情で、母の命令にも好く服従して働いた。併し、それは本の十日許りだつたお辰は段段元のお辰になつて來た。

お辰は朝誰よりも一番遅く起きた。夜誰よりも一番早く寐た。お辰は正しく坐る事をさへ知らぬ女だ。朝から晩まで、横坐りに坐つて、客がゐようが誰がゐようが、小楊枝で前齒を突き突きなながら、新聞許り讀んでゐた。

お辰は又誰よりも湯が長かつた。そして湯から上ると、いつも白粉をべたべたと附けた。醜い顔へ下手に飾られて尙醜くなつた。

お辰は昔から金棒引であつたが、今度家へ來てから、更にそ

れが激しくなつた。お辰はどう言ふ手段でか、忽ち町内に幾多の知り合ひを作つた。かの女はそれを一軒一軒尋ねて歩いて、やれ何處とかの奥様の庇は出過ぎてゐるの、やれ何處とかの旦那様の髭は鬢カラだのと讒訴をして歩いた。

俺はお辰がどんな風をしよう、どんな行状だらうと、一口も干渉しなかつた。俺はお辰が恐いから黙つてゐたのではない。一言でもお辰に口を利くのが厭だから、黙つてゐたのだ。

お辰は益々増長して來た。自分の用を俺の母にさせる。俺の妹を自分のお供のやうにして、連れて出る貴族的な俺の家庭はこの醜い女の爲に甚だしい侮辱を受けた。

それでも俺は黙つて見てゐた。決して女が怖いからでも恐ろ

しいからでもない。俺は女に口を利くのが厭だつたのだ。

母は俺に『お前が言はなければ駄目だ。』と言ふ。俺は又『言つたつて無駄だ。』と言ふ。こんな事で時々俺と母との間に小衝突があつた。

憎むべき女だ。毒汁のやうな女だ。

手記の八。

誘惑が來た。恐ろしい誘惑が來た。自然律を覆へすやうな矛盾した誘惑が來た。

俺に對する誘惑のシムボルは、俺の最も嫌つてゐる、俺の最も憎んでゐる女に、血と肉を借りようとしてゐる。

打算。

これが又誘惑の火に油を注いだ。「あんな女の爲に俺は大分の金を費した。俺は自分の罪に對して當然拂ふべき科税以上の金を使つた。

向うが罪の償ひを求めたやうに、こつちも金の償ひを要求しなければならぬ……

手記の九。

俺はとうとう運命の手に玩ばれて了つた。俺の意志も、俺の感情も、俺の智識も、運命といふ暗闘の中へ吸ひ込まれて了つた。

矛盾とは何ぞや。即ち「俺」である。

俺にはもう苦痛もない。煩悶もない。唯、「不思議」がある許りだ。

俺は頭に描いても戦慄するやうな事を、眼も塞がずに平氣でしてゐるのだ。

歴史は繰返す——罪は繰返す。

俺の生活は、見むと欲せざる者を見、聞かむと欲せざる者を聞き、食はむと欲せざる者を食つてゐるのだ。

醜いと思ふと同時に美しいと思ふ事が出来るのは今の俺の頭脳だ。

俺は今不愉快極まる事を笑ひながらしてゐるのだ。厭で厭で

堪まらぬものを喜んで食べてゐるのだ。
俺は矛盾の具體化だ。矛盾の具體化は俺だ。

手記の十。

お辰は益々暴威を振ひ始めた。

俺の妹は屢々お辰に打たれた。

俺の母は或時お辰に足蹴にされた。

俺の家には日毎に争闘があつた。

併し、俺はやつぱり黙つてゐる。いつまでも黙つてゐる。俺

は何を聞いても何を見ても、口を縫はれた人のやうに黙つてゐた。

女は勝ち誇つて、家中大手を振つて歩いた。

手記の十一。

とうとうお辰と俺との事が新聞へ出た。

新聞屋は大きな聲で、その新聞を賣つて歩いた。俺は新聞を買ひ占めた。外の新聞屋が又大きな聲で賣りに來た。俺は又それを買ひ占めた。

俺は可なりな金を懐にして家を飛び出した。そしてお辰の兄の所へ助けを乞ひに行つた。

手記の十二。

縛 捕

逃にげようとする手て頸びに、鎖くわは益々喰くひ込こむ…
(この跡あと拗ち切まれて無なし。)

俊しゆん

寛くわん

(戲ま曲ま)

人^{じん}物^{ぶつ}
俊^{とん}寛^{かん}
有^{あり}王^{わう}
九^{きゅう}州^{しゅう}の商^{あきうど}人^{ひと}
第^{だい}一^{いち}の島^{しま}人^{びと}
第^{だい}二^にの島^{しま}人^{びと}
第^{だい}三^{さん}の島^{しま}人^{びと}

時代
治承三年の夏

場所
硫黄が島

紅の袴着たる女房二十三人
船子一人
雑色一人

松の前
鶴の前

第四の島人
第五の島人
新大納言成親
丹波少將成経
平判官康頼
多田藏人行綱
西光
松浦太郎高俊
難波次郎経遠
妹尾太郎兼康
丹左衛門尉基康

硫黄が島の一角、岩白く、石白く、砂白し。左に大なる岩山、頂上に祠めきたる凹み、裾に人の自由に出入りし得る程の洞二つ三つ。右に稍小なる岩山。岩蔭に俊寛の庵。竹の柱、蘆の枯葉の屋根、古き萎えたる錦襦の帳。外の柱に白鷺の首しめたるを一羽吊す。

左の岩山との間は、平なる砂地。その向うは渺茫たる大海。海の向うに火山、黄いろき火を垂直に噴く。

星あかり。深夜。静なる浪の音。

流人俊寛、瘦せ勞れたる體を横たへて庵に眠る。色黒き島人五人、砂地丸くゐて、酒

飲む。貝の盃、瓶子。火山の火の光、明暗交する毎に、島人等の顔明暗交す。

島人、盃を廻らしつゝ、一人一人に間を置きて、靜に物語る。沈みたる調子。沈みたる顔。

第一の島人。
第二の島人。

廻せ廻せ。

廻せ廻せ。

第三の島人。
第四の島人。
第五の島人。
第二の島人。

盃が毀れた。

臭い盃ちや。

酒を飲まいで、盃を噛み碎いたものがある。

毀れたら、また掘り出すまでちや。(貝を掘り出す。)

第一の島人。
第二の島人。
第五の島人。
第四の島人。
第三の島人。
第五の島人。

酒はあるか

何ぼでもある。

(海を指して) あれは皆酒ちや。

(盃の中を覗くやうにして) 鹽辛い酒ちや。

咽喉が引ツつるわ。

聲の潰れるまで飲まうぞ

- 第二の島人。
- 第一の島人。
- 第三の島人。
- 第二の島人。
- 第五の島人。
- 第一の島人。
- 第四の島人。
- 第三の島人。
- 第二の島人。
- 第三の島人。

あの蜻蛉のやうに瘦せた親爺か。
 あの親爺なら、晝でも寐てをる。
 晝でも夢を見るやうな眼附をしてをる。
 毎晩うなさるといふではないか。
 恐ろしい聲を出すぢやて。
 恐ろしい夢を見るのぢやらう。
 晝間は少しも物を言はぬ親爺ぢや。
 啞ぢやらう。
 でも、はつきりと寐言をいふぞよ。
 何の事やら分るか。
 一向に分らぬ。おれらの知らぬこつちや。

- 第二の島人。
- 第四の島人。
- 第一の島人。
- 第二の島人。
- 第三の島人。
- 第五の島人。
- 第一の島人。
- 第二の島人。
- 第四の島人。
- 第五の島人。

〔稍長き間、盃めぐる。〕

息の塞がるまで飲まう。
 命が絶えれば、極樂ぢや。
 なりや、ここは地獄か。
 おれらは地獄へ生れて来たのか。
 極樂へ死んで行くのぢや。
 死んで極樂へ行くのぢや。
 暗い晩ぢや。
 夜が更けたのぢや。
 嘘を言へ、まだ宵ぢや。
 でも、小屋の親爺はよう寐てをる。

第二の島人。

毎晩ちや。

第一の島人。

毎日か。

ちや。

第五の島人。

いんや、夜さり懸けては、朝海へ捨てて了ふの

第三の島人。

食ふのか。

第二の島人。

さうちや、首が絞めてある。

第一の島人。

首が絞めてあるちやないか。

第五の島人。

毎日々一羽つつ吊るしてある。

第四の島人。

あの白鷺は何ちや。

第三の島人。

おれも知らぬ。

〔稍長き間。盃めくる。〕

第五の島人。

坊主のやうちやな。

第四の島人。

でも、生魚を食ふぞよ。

第三の島人。

手を合せたを見た事がない。

第四の島人。

何處の者ちやらう。

第一の島人。

ここの者ちやない。

第二の島人。

地獄へ生れて来た者ちやない。

第三の島人。

死んで地獄へ来た者でもない。

第五の島人。

生きながら地獄へ流れて来た者ちや。

第四の島人。

何處の者ちやらう。

第一の島人。

知らぬ。

第二の島人。

おれも知らぬ。

第二の島人。
 第三の島人。
 第四の島人。
 第一の島人。
 第五の島人。
 第三の島人。
 第一の島人。
 第二の島人。

は、は、は。月も地獄は嫌ひと見える。
 (火山を指して) 地獄に絶えぬは、あの光ばかりぢや。
 あの光でも時々消ゆる時がある。
 したら、聞ぢや。救ひがたい聞ぢや。
 さういふ聞にあうた事があるか。
 おれは一度ある。
 おれは二度ある。
 おれは三度ある。
 おれは今宵のやうによろ燃えるを見た事がない。
 消ゆる前には、いつもよろ燃えるぢや。

第五の島人。
 第三の島人。
 第五の島人。
 第四の島人。
 第一の島人。
 第二の島人。

「稍長き間。盃めぐる。」

第一の島人。
 第五の島人。
 第四の島人。
 第三の島人。

おれが見ただけでも、五十羽は懸けた。
 懸ける時、何か言ふぢやらう。
 言はぬ。ただ氣味悪う笑ふばかりぢや。
 氣違ひぢやらう。
 さうかも知れぬ。
 さうかも知れぬ。
 月はまだ出ぬか。
 もう沈んで了つたのぢや。
 赤黒い月ぢやつた。
 波の上に出たかと思つたりや、すぐ隠れて了う

寛 俊

第二の島人。 今宵も消ゆるな。
 第四の島人。 なんとも知れぬ。
 第五の島人。 なんとも知れぬ。

〔稍長き間。盃めぐる〕

第二の島人。 寂しい。
 第三の島人。 火を吹く音がはつきりと聞える。
 第五の島人。 寂しい音ぢや。
 第二の島人。 聞きたうもない音ぢや。
 第四の島人。 歌でも唄はうて。
 第一の島人。 誰ぞ舞はぬか。
 第二の島人。 おぬし舞へ。

第四の島人。 おぬし舞へ。
 第三の島人。 舞はうか。〔立つて舞ふ。〕
 他の島人等。〔舞に合せて唄ふ。〕

波にただよふ
 蟹のなきがら

ゆらりゆらりと
 ゆらりゆらりと
 月の光を
 はこぶなきがら
 ゆらりゆらりと
 ゆらりゆらりと

〔この舞のなかばに、火山の火急に消ゆ。同時に星も光を失ふ。少時間黒。人の立ち騒ぐ氣はひ。涙の音〕

第一の島人の聲。消えた。

第五の島人の聲。消えた。

第四の島人の聲。消えた。

俊寛の聲。只今あかしをもて參るぢや。

〔あたり急に明るくなる。星の光にもあらず、火山の火の光にもあらず、大海の青白く光り出だせるなり。第一の島人に代りて成親座す。第二の島人に代りて成經座す。第三の島人に代りて康頼座す。第四の島人に代りて行綱座す。第五の島人に代りて西光座す。各の顔、元ゐたる島人の顔に似たり。衣服も、島人の着たる物の上に、袈裟狩衣など忙てて重ねたる様に見ゆ。一同無言。時々口を開けども、聲聞えず。酒に酔ひたる態。瓶子地上に倒れたり。俊寛、庵の内より起き出で、貝殻に塞つけたるものを持ち来る。火とぼりなるつもりなれど、火とぼりをらず。同じく酔ひたる態。少しも弱

弱しげなる様子なし。〕

俊寛。山おろしに火をとられたさうな……平家の命もやがて

これぢや。

康頼。(瓶子を指して、口を動かす。)

俊寛。なに……なんと……言はるる……瓶子が倒れたと申さるるか……むむ……いかさま……事のはじめに先づ平氏の倒れたるは心地よし。

西光。(瓶子をとり、その首をもぎて俊寛に見せ、口を動かす。)

俊寛。はははは……倒れたる平氏……首をとるに若かずと言はるるか……愈面白し。

成親。(俊寛に向ひて口を動かす。)

俊寛。なに……愚僧に猿樂つかまつれとな……そは判官の殿の役目ぢや……なう判官殿……なに……たッて愚僧の見たしと仰せらるるか……然らば仕らう。

〔俊寛、首の無き瓶子を差し上げ、酔ひたる足を踏みしめて舞ふ。一同手拍子をとる、但し音はせず。次の歌、何處よりともなく、微に聞え来る……〕

あまりへいしの多ければ、

あまりへいしの多ければ、

酔ひて候、倒るるまで酔ひふとりて候。

そのへいし、すでに倒れ亡びぬれば、

首とりて候、首丁とはなちて候。

とりたる首は、先づ大路を渡さむ、

さて獄門の楞の木にかけむ。

〔この間に行綱黙して立ち、左手の洞の中へ消ゆ。一同氣づかず。舞まさに終らむとする時、行綱の入りたる洞より松浦太郎高俊、太刀を佩き、繩と鞭とを持ち出て來り、物をも言はず西光を縛し、鞭うち、刀を擬す。一同に知らず。俊寛ひとり氣づきて舞をやむ。〕

俊寛。こりや高俊どの。西光をなんと召さるる……なに、謀

叛ぢや……謀叛のかたらひしたと言はるるか……はて、

不思議……天下の安きを計るが何で謀叛ぢや……

〔高俊、俊寛には目もくれず、西光を引立てて、右の岩蔭に消ゆ。直ぐ又、左の岩山の他の洞より難波次郎經遠出て來り、同じく無言にて成親を引ッ立つる。〕

俊寛。經遠どの……大納言の殿をいづれへおん供申すぞ……

……なに……これも謀叛ぢや……はて何が謀叛か……

……左大將を望まれたが謀叛か……徳大寺の卿も望まれた
……花山の院の中納言も望まれた……愚僧ぢやとて望ま
ぬとは限らぬ……

〔経遠、構はず成親を洞の内へ連れ去る。直ぐ又、他の洞より妹尾太郎兼康出て来り、
成経と康頼との衣を剥ぎ去る。俊寛、呆れてこれを凝視す。成経、康頼、もとの島
の姿となる。一同、酒の醒めたる態。暫く沈黙。〕

俊寛。

〔あたりを見廻し、わが姿をも顧みて〕

や……ここは何處ぢや……

なに硫黄が島ぢや……なぜ斯やうな所へ流された……謀

叛の咎によりてとな……謀叛とは院にさからふ事ぢや……

……人臣の傲れるものを亡ぼすが何で謀叛ぢや……

〔成経、康頼、黙して立ち、岩陰より細長き木切れやうのもの數多持ち来り、その一つ
一つに小さき木切れにて何を彫りつけ、拜みては海に流し、拜みては海に流す。〕

俊寛。

何をなさるる……なに……都の戀しきままに……

千本の卒塔婆を作りて……海へ流す……なに……一本

なりとも……都へ届かば……願足るとか……〔卒塔婆の一

つをとりに讀む〕さつま淵……沖の小島に我有りと……親には

……告げよ八重の……汐風……はははは……〔他の一

つをとりに讀む〕思ひやれ……しばしと思ふ……旅だにも……

……なほふるさとは戀しき……ものを……はははは……

……かかる願が何になる……佛に何の力があらう……神

に何の力があらう……歸らば、泳ぎ歸るぢやまで……人

の力ぢや……人の力ぢや……

〔成経、康頼、濱木綿にて幣を作り、左の岩山の頂上へ幾度となく登り降りす。〕

寛 俊

俊寛。これは又何ぢや……なに……熊野詣ぢや……なに、
かの岡の上を熊野権現と思ひて、三十三度の参詣をなさるる
……それも亦歸洛の願か……はははは……神かくれ天
魔はびこるこの國に……さやうの祈り如何程のかひあらむ
……はははは……

〔康頼、成経に何か耳うちし、頂上の祠めきたる凹みを拜みたる後、立つて靜に舞ふ。
次の歌、何處よりともなく、微に聞え来る。〕

さまも心もかはるかな。

落つる涙は瀧の水、

妙法蓮華の池となり、

弘誓の舟に竿さして、

沈むわれらをのせ給へ。

〔この舞の内に、大なる木の葉二つ、空より落ち来る。俊寛、それを拾ふ。舞終ると、
葉の面を讀む。〕

俊寛。なに……かたかたには「歸雁」とある……歸雁……

……歸雁……むむ、歸る雁か……見よ、祈らでもこれぢ
や……

〔成経、康頼、喜び合ふ様子。〕

俊寛。かたかたには……なに……「二つ」とある……二
つ……二つ……なぜ三つとはなきぞ……（稍悲しげなる表情）

〔康頼、又立つて舞ふ。次の歌、又何處よりともなく、微に聞え来る。〕
よろづの佛の願よりも

千手のちかひぞたのもしき。
枯れたる草木も 忽に、
花咲き實のるところ聞け。

〔この舞の中ばに、紅の袴着て、鼓をわきばさみたる女房二三十人、朦朧と砂の上にあ
らはれ、康頼と共に舞ふ。康頼、驚きて舞をやむ。女房達、構はず舞ひ續く。次の歌、
又遠くより聞え来る。〕

人人の、人人の、

都歸りも近ければ、

名残を慕ひて來れり、

來れり、名残を慕ひて

俊寛。

〔面持晴れやかになりて〕 あれ見よ……多くの女房が名残を惜し

みに參つた……二人のみかは……三人も……四人も……
……十人も……二十人も……それ、それ……愚僧を
見てほほえみをる……招きをる……愚僧もやがて歸るち
やて……

〔俊寛、女房達へ近寄る。と女房二人のみ残りて、他は悉く消ゆ。〕

俊寛。

や……鶴の前に松の前な……さがれ……さがれ……

……身共は知らぬ……なに、わが謀叛はそち達故ぢや……

……おろかな事を申せ……天下の爲ぢや……萬人の爲

ぢや……なに……成親の卿よりそち達を貫ひたさに……

……かたうどしたと申すか……たはけめ……嘘ぢや……

……なに、松の前に子が出來た……子とは何ぢや……僧

に子はない……知らぬ……知らぬ……知らぬ……知らぬ……

〔二人の女房、俊寛に身近く寄ると見れば、つと消ゆ、俊寛、呆然たり。直ぐ、舟一艘、海に見ゆ。男三人乗る。〕

俊寛。(俄に活潑なる表情) おお……おお……それ、それ……参

つた……使が参つた……都より使が参つた……

〔俊寛、走りて岸へ近づく。舟着く。丹左衛門尉基康、雑色一人連れて降りる。水戸舟に残る。基康、雑色が首にかけとる布袋より書状やうのものを出して、何やら頷きつ俊寛に渡す。成経、康頼もそのへ側寄る。俊寛、書版をひろげて讀む。〕

俊寛。中宮御産の御祈禱に依り……非常の大赦行はるるの内

……薩摩潟硫黄が島の流人丹波の少將成経并に平判官康頼

法師歸洛すべきの由……丹波の少將成経并に平判官康頼

……丹波の少將成経……平判官康頼……俊寛の名のなきはいかに……むむ、禮紙にこそ……(禮紙を見る)禮紙にもなし……

〔俊寛、康頼心亂るる様にて、赦免状を奥より端へ讀み、端より奥へ讀む。やがて、手より取落す。成経、康頼、これを拾ひとりて讀み、氣の毒けに俊寛を見る。〕

俊寛。(基康に向ひて) 吾等三人は同じ罪ぢや……配所も同じ所ぢ

や……如何なれば同じ赦免に我一人とり残さるるぞ……

平家の思ひ忘れか……執筆のあやまりか……

〔基康、俊寛に目もかけず、成経、康頼をさし招く。〕

俊寛。(成経の袖に縋りて) 俊寛がかやうになるといふも、御邊の父、

大納言殿のよしなき謀叛故ぢや……かまへて、よそ事と思

ひ給ふべからず……もし赦されずば、都までとは申すまじ
 ……せめては同じ舟にのせて、九州の地まで連れ給へ……
 ……(成經の袖を押へたるまま、又康頼の袖をひかへて) 日頃の嘆きは物の數にあ
 らず……故郷の戀しきも、この島の悲しきも……三人語
 つて泣きつ笑ひつすればこそ慰む便ともなつたのぢや……
 それさへ忍びかねて、しばしばうき音を泣いたに……われ
 捨ててのぼり給ふあとの寂しさはどうぢや……思うても恐
 ろしい……ああ三年の契も絶えはつるか……ひとり留め
 て歸り給ふか……名残惜し……名残惜し……(泣く)

〔基康、成經、康頼、構はず舟へ乗る。俊寛、物狂はしく、舟に乗りては下りつ、下り
 ては乗りつする。水主、纜を解く。俊寛、綱にとりつき、舟の腰になり、脇になり、
 丈の立つまで海の中へ引かれて出づ。水、頸に迫る。俊寛やうやく綱を放し、岸へ轉

び上る。〕

俊寛。 方方、俊寛をばつひに見捨て給ふか……おおい……

おおい……(延び上り、足摺りして) おおい……おおい……

〔舟隠る。〕

俊寛。 おおい……おおい……おおい……(倒れ伏す。)

〔稍長き間。左の洞より有王と九州の商人出て來り、倒れ伏したる俊寛の前に立つ。〕

俊寛。 (顔をあげ。稍反抗的なる表情) や……そちは有王か……それな
 るは誰ぢや……なに……九州の商人を案内に連れて參つ
 たと申すか……何しに來た……なに、迎へに來た……
 迎へに來る用はない……歸れ……歸れ……歸れ……
 俊寛はいつまでも一人でをるのぢや……平家が迎へぬとあ

らばよい……天下が捨てたとあらばよい……もう誰が来ても歸らぬ……歸らぬ……いつまでも一人でをるのぢや……いつまでも……いつまでも……生きながら鬼になるまで、この地獄の火に焼かれてゐるのぢや……(兩手に顔を掩ひ、走りて庵に入る)

〔つと大海の光消ゆ。暫く闇黒。やがて曙光。あたり仄明くなる。火山、勢よく青き烟を噴く。後寛、庵の内に、幕の開きたる時と同じ形して眠る。有王と九州の商人闇、黒前と同じ形して立つ。闇黒前の二人より、顔容少しくやつる。〕

有王。もう今日で十日ぢや。

九州の商人。十日十夜でござりまする。

有王。すでに世を終へさせられたか。

九州の商人。左程短いお命でもござりますまい。

有王。でも……山にも谷にもお姿に似たものは見えぬ。

九州の商人。勻さへもござりませぬ。

有王。勻とは。

九州の商人。人の勻でござりまする。

有王。それも血肉の枯れ果てては。

九州の商人。血肉は枯れても人のたましひは勻ひまする。

〔稍長き間。〕

有王。三人の内二人は歸つた。一人は行くへも知らずさまようて行つたと島人が申してゐた。

九州の商人。この世の亡びるまで、さまようてござりませう。

有王。この島中をか。

九州の商人。いいや……島をも……海をも……空をも。
有王。むむ……さまようてをられようて……主人は不信に
をはした。

〔稍長き間。〕

有王。(元結に手をやり)姫君の御文も潮になえて、御心こもりし水莖
の跡もさぞにじんだ事であらう……(ふところへ手をやり)京より持
ち参りし菓子も、早ほろほろに……

九州の商人。(遮つて)もはやお歸りなされては如何と存じます。
有王。さまを變へて菩提を弔へか。

九州の商人。忘れておしまひなさりませ。
有王。忘るる事が出来ようか。

九州の商人。御主人は神佛をもお忘れなされました。

〔短き間。〕

有王。(俊寛の庵に目をつけ)あれ見よ、あれも島人ぢや……京童が築
地の腹などに造りたる犬の家にも劣れるものかな……あは
れ、わが主人若しいまさば、あのやうになりてもをはさう……
……なぜといへ……かりにも法勝寺領を知行し給ひなが
ら、修理造營をもし給はず、恣に三寶の布施を受け、あく
まで伽藍の寺用を貪り給ひし罪のむくひに……生きながら
餓鬼道に落ち……

〔俊寛、起き出づ。いたく衰へたる様なり。黙して柱の白鷺をとり、海へ捨てに行かむ
とす。有王、物語りつつ、じつとこれに見入り、直ぐそれと氣づく。〕

有王。 やや……君ぢや……君ぢや……商人……君ぢや。

〔俊寛、逃ぐるやうにするを、二人してやうやうに捕ふ。〕

有王。 〔獨語のやうに〕 あさましいお姿……あさましい。

〔俊寛、更に物言はず。甚しき激動を強ひて隠す様子。〕

有王。 〔俊寛の顔を覗くやうにして〕 なぜ物を 仰りませぬ……夢とでも

思召してか……これは現でござりまするぞ……現でござりまするぞ……君、君、なぜ物を 仰りませぬ。

〔俊寛、眼を見張りて一方を凝視するのみ。物言はず。〕

有王。 さらに、こなたより申し上げう……君の西八條へ出でさせ給ひし後、官人參つて資財雜具を破りとり……お内の者ども搦めとり……みな失ひ果てましてござりまする……

……北の方はおさなき君をつれ給ひて、鞍馬の奥へお忍びなされました……悲しき事の多かる内にも、おさなき君はこの童の顔を見給ふ度に、「如何に有王よ、われ硫黄が島とやらへ具して參れ。」とおむづかり……その悲しく愛らしき聲も……過ぎし二月、瘡と申すいたつきに絶えさせられ……北の方のおん嘆き……それよこれよと思し召し沈ませ給ひしが、さんぬる三月二日の日、つひにはかなくなりなされしました。

〔俊寛、尻居にどうと倒る。〕

有王。 今は……今は姫御前ただ一人、奈良の姨御前の御許に忍びてをはしまする……それよりのおん文……（もとどりよ

リ文を出して、俊寛に渡す。

〔俊寛、これを手に取りて、紙の面を見れども、字義通ぜぬ面持。〕

有王。あまりみ心つかはれて、文字さへ讀めずなり給ひしか。讀んで參らすべし。(文を讀む)その後たよりなき孤子となり果てて、お行くへをも承る便もなし。身の有様をも知らせ參らせず。いぶせさのみ積れども、世の中かきくらしして晴るる心地なく侍り。あはれ、尊きも卑しきも女の身程いひかひなきことは候はず、男の身にて候はば、渡らせ給ふ島へも、など尋ね參らで候ふべき。この童をお伴にて急ぎ上らせ給へ。戀しとも戀し、ゆかしともゆかし。三年の嘆き、水莖に盡し難く侍れば……………

〔俊寛、この文の言を聞く内、段々に氣の遠くなる様子。つひに絶え入る。〕

九州の商人。(靜に俊寛をささへ、冷かに) 有王様……………有王様。
有王。(それと見ると、文を捨てて俊寛に抱きつき) や……………君……………何となさ
れまする……………何となされまする。

〔俊寛、有王と九州の商人とに抱かれて永き眠に入る。夜、全く明く。涙の音。遠く近く鷺の聲。極めて靜かに暮。〕

(一九一〇年、七月習作)

鸞うそ

目めく

次じ

小山内 薫著

大川 端 長篇

一月發行

大正二年三月二十日印刷
大正二年三月廿五日發行

定價金壹圓

著 者 小 山 内 藤

發 行 者 東京市京橋區銀座三丁目八番地 粉山仁三郎

印 刷 者 東京市下谷區上野櫻木町四十番地 小松周助

印 刷 所 東京市芝區豊町三丁目二番地 東洋印刷株式會社

發 行 所 東京市京橋區銀座三丁目八番地 大塚市東區南久太町三丁目 粉山書店

振替貯金(東京二四一七番 大阪一三六八六番)

272
631

終

